

図7：エディプス・コンプレックスの諸段階

\*L  
(図6)

\*1  
幻想の形成は、下記のように行われる。

前象徴界への参入

\*2 まず、  
幼児期において予期されない体験としての対象aが顕現した際に、  
養育者がそれを繰り返し解決するという前段階がある。

\*3  
その段階において、  
養育者は対象aの解消と結びつけて認識される。

\*4  
養育者は様々な感覚的特徴を持ち、  
また様々な働きかけを幼児に対して繰り返し行う。

\*5  
養育者の現前と養育者の様々な働きかけは、  
幼児の脳の中で  
対象aの解消（＝満足）と  
結びついたシニフィアンとして  
蓄積されていく。

\*6  
そうして形成されるシニフィアンの体系が  
「大他者（＝A）（＝『（精神的）母』）」  
として前象徴界を形成する（＝「前エディプス期」）。

## エディプス第一の時 (= 「前エディプス期」 )

- \*7 しかし、大他者は以下の二点で対象aを十全に解消することはない。
- ・シニフィアンは体験との予測誤差をゼロにすることはない
  - ・養育者は現前と不在を繰り返し、幼児を不安にさせる
- 上記二点が「大他者の非一貫性 (=  $\mathcal{A}$ )」を形成する (= 「不満」 )。

- \*8 そこで、幼児は  
「大他者を一貫したものにする要素  
(= 「ファルス」)」を探し求める。

- \*9 このとき、幼児にとってファルスは  
「自分が『それ』になることができるかもしれないもの」  
としての「想像的ファルス」として現れている。

## エディプス第二の時

\*10

エディプス第一の時において、養育者が  
「養育者の現前と不在を司る対象  
(= 「(精神分析的) 父」)」を  
シニフィアンとして幼児に示すとき、  
幼児は「父」を用いた幻想の構築を開始する。

\*11

父が父として幼児に作用するためには、  
父は幼児の前に現前するものから  
超越していなければならないため、  
父は幼児の前に現前してはならない。

\*12

まず、幼児は父を  
「大他者からファルスを『剥奪』した『想像的父』」  
として解釈するようになる。

### エディプス第三の時

\*13 しかし、このとき父は「ファルスを持つ者」としても現れている。  
その側面を受容するとき、幼児はファルスの存在を  
ファルスが現前しない状況のまま信じられるようになるので、  
幼児は**大他者の非一貫性を大他者の本質として**  
認められるようになる（＝大他者の「去勢」を受け入れる）  
（＝ $S(A)$ ）。

\*14

幼児に**大他者の去勢を**  
認めさせる者としての父を  
「**現実的父**」と呼ぶ。

\*15 父がファルスを持つと解釈されるとき、  
父は**超越的な「法」**によって  
大他者を統御する者と解釈されるようになる。

\*16 このような父を  
「**象徴的父**（＝『父の名』）」と呼ぶ。

\*17 父が持つ法の根拠としてのファルスは  
「**象徴的ファルス**」と呼ばれる。

\*18 これは、幼児が**自身の対象a**について  
「父および父の持つファルスを用いることで  
究極的には解決可能なものである」と  
解釈できるようになることと等価である。

\*20 現実的父に同一化し、  
自身も象徴的ファルスを父のように  
持とうとする主体を  
「**（精神分析的）男**」という。

\*21 象徴的ファルスに同一化し、  
ファルスを持つ現実的父に欲望されることで  
ファルスを間接的に持とうとする主体を  
「**（精神分析的）女**」という。

\*19 そこから、主体は**対象a**を解消するために  
自身もファルスを持つことを「**欲望**」するようになる  
（＝「**欲望の主体**」の誕生）。

\*M  
(図8)